

随想

春日遅遅

八木三男

一

柳田国男は大正末期に「雪国の春」（『定本柳田国男集』第二巻、筑摩書房）という短い珠玉の文章を書いた。すでに古典的なものであり、あまりに高名すぎていまさら引用したり紹介したりするのも気が引けるが、「雪国の春」は雪国の生活の辛苦が主題なのではなく、本居宜長のいうような「片田舎には古へさまのみやびたる事の残れるたぐひ多し」（玉勝間）といった常民概念に基づいて、雪国の常民の生活を「春」を主題に暖国のそれと対比しながら提示したものである。当時としては雪国の生活を対象化した画期的なものだったろ

う。

雪国の春は、待ち焦がれる気持ち強い分だけなかなか来ない。来たと思ったらすべての花が一時に咲き誇り、足早に深い夏の緑に移っていく。そんな短い春の雪国に住むわたくしにとって、興味深いのはかえって「雪国の春」のなかの暖国の春の叙述であった。

たとえば以下のような箇所である。大和や難波あたりの暖国の人には「春は飽きる程永かった」。「昨日も今日も一つ調子の、長閑な春の日の久しく続く国に住む人」にとつて「嵐も雲も無い昼の日陰の中に坐して、何をしようかと思うやうな寂寞が、いつと無く所謂春愁の詩となった。女性に在っては之を春怨とも名づけて居たが、必ずしも単純な人恋しさではなかった。又近代人のアンニュイのやうに、余裕の乏しい苦悶でもなかった」

そこですぐ思い出されるのは大伴家持の「春愁」に關連する『万葉集』の絶唱三首とその後書きである。

春の野に霞たなびきうら悲しこの暮かげに鶯鳴くもわが家戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りし
念へば

春日遅遅にして、鶺鴒（ひばり）正に啼く。悽惻の意
（痛み悲しむ心）歌にあらずは撥（はら）い難し。仍りてこの
歌を作り、式（しき）ちて締結（しめく）を展（ひら）く（結ばれた心をひらく）。

「春日遅遅」の訓説は「はるひうらうら」である。
「うらうら」という言葉は家持の創出だといわれる。

「春のうららの隅田川」と同類。試みに「春日遅遅」
を『広辞苑』にあたると、春の日がうららかでのどか
春の日のどかで暮れるのが遅いさま、などとあった。
古豪大伴氏の総帥・政治家家持にしてみれば、新興の
藤原仲麻呂の威勢が強大化するにつれて、身辺に迫り
くる政治的葛藤を警戒していたであろう。佐保の邸に
ひきこもりがちだった。この「春愁」を「近代的」ア
ンニユイと評した吉沢義則以下の万葉学者の論評を、
北山茂夫は、家持が貴族の、いわばみやびの感情の成
熟をこそ示せ、無知で笑止な説だといつて切り捨てた
『万葉集とその世紀（下）』新潮社。

話は替わるが、一時ロサンゼルスに遊んだとき、チ
リの詩人パブロ・ネルーダを愛し、美術史を専攻する

若いアメリカ女性に、さきの家持の第三首目「うらう
らに照れる春日」を英語初学のころ親しんだロバート
・ブラウニングの詩 *Pippa's song* に似せて英訳して
示したところ、八世紀にはなんと近代的なんだろ
うといったく感心していた。歴史的環境を捨象してその
ものだけを取りだせば、近代的アンニユイにも通じる
だろう。

参考のために「遅遅」について付言すれば、この言
葉は中国では古くから「威風遅遅」というように「ゆ
ったりしている」「せせこましくない」という意味に
使われていた。良寛に「春日遅遅」を主題にした「藤
氏別墅」（『草堂詩集』）という格好の漢詩がある。

荒階花如霰	荒階	花	霰のこと
幽鳥語似織	幽鳥	語	織るに似たり
遅遅窓日麗	遅遅	窓日	麗らかに
細々爐烟直	細々	爐烟	直し

二

「春日遅遅」を家持が作ったのは二月二十三日から
二十五日にかけてである。当時の暦を現在の暦に正確

に直す術はないらしいから、三月末ころと推定するとして、「春日遅遅」にはいやな思い出がある。もう三十数年もまえの話だが『朝日新聞』なら「天声人語」にあたる『新潟日報』のコラム「日報抄」が「春日遅遅」誤用していたので、わたくしはその用例として上記の家持の歌を付して丁寧な手紙を編集局宛に送ったことがあった。てつきり簡単な札状でもくるものと思っていたらなしのつぶてだった。「日報抄」に訂正記事もでなかった。

「日報抄」では春が遅遅としてなかなかやってこない意味に使っていたのである。ちょうど三月末くらいの記事だったのだらう。若い当時のわたくしも恥ずべき誤用や無知をたびたびおかしいたから、誤用と無知は誰にでもあると思っていたに違いないのだが、「日報抄」の記者の春を待ちわびる気持ちに同感しながら、歴史的に由緒ある言葉の誤用を許せなかったのだと思う。新聞社に投書ともとれる文章を送ったのは後にも先にもこれ一回きりだ。人の言葉の誤用を指摘するのには勇気がある。相手から感謝の言葉を聞くことはきわめて稀である。相手の内心は知らず、かえっ

て関係がギクシャクする場合が多い。

三

「雪国の春」にもどうろう。その最後に、柳田は雪国の真冬の淋しさは忍び難いことであつたろうが、「冬籠もりする家々には、古い美しい感情が保存せられ培養せられて、次々の代の平和と親密とに寄与していたのである」といった。「幸いにして家の中には明るい囲炉裏の火があり、其火のまわりには又物語と追憶とがあつた」「誰しもこの天地の平和を大切に、いつかは必ず来る春を静かに待つて居る」。たしかに、たとえば農家の小さい子たちにとつて、四六時中親が家にいる冬ごもりは楽しい季節だったに違いなかった。しかし、田中角栄の日本列島改造以来、消費生活の全国的な平準化のなかで、暖国と対等の経済活動を余儀なくされ、多くの親たちは遠くへ出稼ぎにいくようになった。そして子たちを楽しませた冬ごもりは基本的になくなり、冬は寂しい季節になった。それはともかくとして、かつての寒く厳しい冬ごもりと貧しい生活を経験したわたくしなどは、柳田とちがつて「明る

い困炉裏の火の周り」には、貧しさゆえの親子の葛藤や生活苦を見てしまうわけで、冬ごもりが伝統的に新潟県に尊属殺人が多いことや秋田と並んで高齢者の自殺率が高いことなどとも関連があるだろうと思うのだ。柳田の雪国生活の叙述は鈴木牧之の『北越雪譜』などと比較すると、叙情的に美し過ぎるのだ。

豪雪のなかの厳しい冬の生活をうとましく思っていたが、若いころは厳しい雪の冬を季節にめりはりがあるようで必ずしも嫌いではなかった。かつて冬の西伊豆を旅したとき、あまりの暖かさに、これでは冬には頭が働かないのではと疑った。いまは雪国の生活は昔と一変した。道路や交通手段も室内の暖かさも食料も暖国とほとんど隔たりはなくなった。しかし、年をとるにしたがつて冬を好まなくなった。ことに、最近難病で歩行が極端に不安定になると、雪道ははなはだ難儀だ。歩道が除雪されていないからいつそう歩行が困難である。春を待ちわびる気持ちがいちだんと強くなった。

(やぎ みつお・いがた県民教育研究所所長)

